

春の夢

椿海の三百年

匠探訪

(36)

「椿」に関心を持ち大学院の修士論文のテーマにしたいという方が立春の翌日訪ねて見えました。市内の椿地区という地名に着目されたこのことで、案内しながら頭に浮かんだ「春の夢」を紹介します。むかし、椿の巨木があつてそれが枯れ果てて湖となり、椿海（椿湖・つばきのうみ）となったといえます。

下総国の香取、海上、匠瑛3郡にまたがる東西12キロ、南北6キロの湖は、1670年（寛文10年）から干拓工事が始められました。そして1674年（延宝2年）春から新田が売り出され農民の移住も始まり、工事開始から25年後の1695年（元禄8年）になつて新田18か村が誕生しました。

しょうぶ」と宿（しゆく）集落をあわせて村となったのでしよう。同地区には「八重崎」という地名があり、新田18か村の中には「八重穂村（現在の東庄町）」というめでたい村名も付けられました。

「椿・ツバキ」は神意が宿る聖なる木とされ、八百比丘尼（やおびくに）が移植したとも伝承され、共興地区にこの伝説があり椿海との結びつきが考えられます。

ところで、いつころから九十九里浜の海退によつて形成された淡水湖が椿海と呼ばれるようになったのでしょうか。

干拓前には、「太田の湖水」と記載された地図があるとされることから、干拓前後から椿海となったと考えるはどうでしょうか。名を付けるにあたって周辺村むらのうち湖岸の「椿村」に由来すると見るのが妥当でしょう。では、椿村の成立はいつか。1591年（天正19年）の記録に「椿村」とあり、天神・五正部こ

調査の最後に、飯塚の台地から干潟八万石の耕地を見渡しながら大学院生が「これが湖のままだったらどうでしょうね？」とたずねました。しばらくして「椿海300年余りの歴史を振りかえりこの地に生きた人たちのことに想つと、やはり干拓して良かったのではないだろうか」と答え、「今はまだ冬枯れのままで、田植えの済んだ頃や一面が黄金色に染まる時節になるとまた違った印象を受けますでしょうか」と付け加えました。

「椿の魅力と畏怖」をテーマにした調査から椿海の歴史をたどりましたが、「湖のままだつたら…」との質問は、春の夢」のようにも思えました。

関八日市場図書館 ☎73・3746



飯塚の台地から見た干潟八万石